文学部生の
リアルな！学生生活 vol.28

文学部生のリアルな学生生活の様子を掲載し、ご父母の皆さまに文学部生の充実したキャンパスライフの風景、また文学部ならではの取り組み等の情報を発信いたします。

「ドイツ語圏」を軸にさまざまな分野を横断し、究める
―その魅力と可能性―

小池（こいけ）駿（しゅん）
文学部人文社会学科ドイツ語文学文化専攻４年
私立獨協高校（東京都）出身

私と独文との出会い

“Was studierst du?” ドイツ語圏にいる学生なら必ず尋ねられる質問です。同時に、自分がどのような信念をもって大学で専攻しているかを明確に伝えなければならない質問でもあります。私の場合、中学・高校でのドイツ語の授業や課外活動、またＰＡＤ（ドイツ政府招聘事業）への参加を通して「学んだドイツ語を将来的に社会へ還元させる」という信念を抱くようになりました。その過程で、ドイツ語文学文化（独文）領域の学修は、文学・文化・語学のバランスがとれていると知り、ドイツ語文学文化専攻を選びました。

ドイツ語文学文化専攻での学修

学修の課程では、ＣＥＦＲ（ヨーロッパ言語共通参照枠）に基づいたドイツ語科目の履修や、その検定試験の受検をします。その合格証明書は言語の運用能力を示すものになりますが、取得することが最終目的ではありません。各自の興味・関心と結びつけ、卒業論文を完成させることが求められています。私の場合、戦間期ウィーンの作家が出版を通してナチズムに対抗した過程とその思想をドイツ語で卒論としてまとめるために、文学・近現代史に留まらず、ドイツ語で開講されている同時期の絵画を研究するゼミも履修しました。授業をこなしていくのはやや大変でしたが、正直あまり関心のなかった分野の学修も、結果的には卒論の外郭を固めてくれたと感じています。このようにドイツ語と各分野との連関により、知見を深めながら学修できることがこの専攻の大きな魅力です。

カール・マルクス・ホーフ（戦間期のウィーンでは住宅建設が盛んだった。そのうちの一つ）

ウィーン楽友教会前にて

机上だけではなく……

机上での学修をより有機的にさせるため、私は給付型奨学金である「文学部学外活動応援奨学金」をいただいて、２０１９年９月に「戦間期における民主主義の相違 ―ウィーンとベルリン―」のテーマのもと、ドイツとオーストリアへ渡航しました。既述の通り、卒論への連関を見出すため、ウィーンではテーマ外の内容も並行して調査を行いました。今回の渡航では、資料収集、実地調査をして関連文献の購入を行い、帰国後の考察につなげるという方法をとりました。報告書を学術的考察へとまとめる段階でうまくいかなかったことがあり、当初想定していた形とは異なる方向性にまとまったことは意外な発見であったとともに、それは計画がやや甘かったということでもあり、悔しさと反省はつきものでした。

しかし、テーマ外の内容の調査と考察が叶ったことは大きな財産です。副題として「ウィーンのカフェ文化と作家」というテーマのもと、Cafe Centralを訪問しました。その入り口には「カフェ文士」として名を馳せた作家の人形があります。その作家を目当てに当

時多くの客が来店しており、今日の賑わい方と類似したものがあるのではないかと考え、なぜ「カフェ文化」として形成され得たのかを歴史・カフェの役割から考察し、まとめました。それをドイツ語で論じるために、2019年11月に上智大学 Deutscher Ring が主催する「第8回ドイツ語スピーチコンテスト」に出場しました。発音にやや難があったものの、審査員特別賞をいただきました。その後の懇親会では先生方からご講評をいただきつつ、他大学のドイツ文学科生やドイツ語学習者との交流を図り、ドイツ語学習への励みや喜びを得ることができました。

「言葉はツールでしかない」とよく耳にしますが、そのツールを用いて課外・学外での学修に取り組む機会を得られたことは、その言語の話者であることの自覚と誇りと責任につながりました。これこそが有機的な学修だと、私は強く実感できました。

「第８回ドイツ語スピーチコンテスト」での集合写真

今後の展望 ―その可能性

私の信念と学修領域とは裏腹に、この分野を直接、あるいは関連させて、かつ安定的に活かせる道は今日の日本では限定されています。さりとて、闇雲に渡独することは賢い選択ではありません。大学院進学、就職のどちらを選ぶにしても、まずは卒業後の地位や身分で遭遇する諸課題の解決と事の創造に努め、その過程で何かしらの形で滞在許可を伴うドイツ語圏滞在が叶うとしたなら、その滞在中ないしは滞在後に得られる成果こそが、おそらくは長いこと抱いてきた私の信念の如実な体現だと見なすことができるでしょう。

「マリア・テレジア」というウィーンのコーヒー。アルコール入り

From the Faculty of Letters

文学部だより @

「ネット」を安全に使うために

文学部事務室
梅沢（うめざわ） 美帆（みほ）

文学部には3つのパソコン教室があり、現在約150台のPCが設置されています。授業での利用のほか、空き時間には文学部生が自由に利用できるようになっています。

大学生活において、授業や課題、プレゼンテーションなど、PCの利用は欠かせないものになっています。日常生活においても、私たちは何気なく、PCやスマートフォンを利用して、文字・音声・画像・動画など、さまざまな情報に気軽に触れています。しかし、「情報倫理」と呼ばれるインターネット社会のルールとモラルについて、十分な知識がないために、知らぬ間に「ネットトラブル」に巻き込まれ、被害者や加害者になってしまうことがあります。私が最近観た映画でも、誰でもしかねない小さな失敗から恐ろしいことが起こってしまい……、人ごとと捉えずに自身にも起こり得るリスクとして、注意しておく必要性を感じました。

トラブルに巻き込まれないために、「情報倫理」の知識を常識として身につけておくことは必要なことです。本学では、2020年度から新入生に対して「INFOSS情報倫理」の受講を必修化しています。「INFOSS情報倫理」とは、インターネット社会でのトラブルを避けるために必要な知識、法律、マナーなどを4～5時間程度の学習で身につけるためのe-Learning教材です。もちろん2年生以上の在学生も受講することができ、本学在学生と教職員は、「manaba」上でいつでも受講することができます。

ご子女には、新年度が始まったこの時期から「情報倫理」を身につけ、トラブルに巻き込まれないよう安全に大学生活を送っていただければと思います。また、ご父母の皆さまにも、ご子女と一緒に「情報環境」について考える機会としていただければ幸いです。